俳人 成田千空研究会

千空研究

第8号

千空さんの方言詩

―千空句版画―

藤田 健次

千空さんの方言詩「ばげ」である。千空さん21歳の時の作。千空さんは、このころすでに俳句を始めていたが、こんな方言詩も時々書いていた。

これは、当時東奥日報社で発行していた『月刊東奥』に投稿したもので、昭和18年1月号に掲載された。後に、日本を代表する俳人となる千空さんに、こんなにユーモラスでおおらかな作品もあったとは、なんとうれしいのだろう。作者名「ち・か・ら」は、千空さんの本名「力」から。

（版画家・会員／八戸市）

目次

千空さんの方言詩 ―千空句版画― 藤田 健次 1
虫と孤独 ―『千空句帖』を読む― 小池 淳一 2
〈回想の成田千空〉
六月の岬 兼平 一子 3
中村草田男句碑建立まで 西谷ともえ 4
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(7)
飯詰時代の意義(二) 俳句とともに生きる 齋藤 美穂 6
私が「成田千空論」を書けない訳 石崎 志亥 9
〈作品鑑賞を読む〉⑦
煮蜆の一つ二つは口割らず 清水 哲男 3
〈千空点描〉兜太と千空 7
〈成田千空資料再録〉⑧
『萬緑』師・中村草田男の千空句評① 11
『俳句研究』津軽のわが俳句仲間 ―昭和二十年代まで 13
『萬緑合同句集』2 16
会員名簿・北極星 16

千空研究会の事業

①詳細な年譜の作成
②千空俳句データベースの作成
③関係資料の収集
④関係者からの聞き取り
⑤会報『千空研究』の発行
⑥『評伝 成田千空』の刊行

虫と孤独

―『千空句帖』を読む―

小池淳一

戦時下の千空の俳句は孤独に彩られている。それは病を得て療養中であったこと、知友の出征が相ついだこと、いくつかの死に向き合ったことなどから生み出されたものであっただろう。しかしこの時期の千空の俳句には、そうした生活上の出来事とはいささか異なる深さと重さで、孤独の影がつきまとっている。

それはおそらく外在的なものだけではなく、千空の内面からにじみ出てきたものではなかったかと思われる。『千空句帖』ではそうした感覚が、虫を拠りどころとすることで印象的に描かれている。

蟲の音のちゝろばかりとなりにけり

ちちろ、すなわちコオロギの鳴き声だけになった秋にじっと耳を澄ませると、そこには孤独しかないように思える。秋の野に鳴き競った虫たちが去って、最後に残ったコオロギの声を一人きりで聴くのである。

ちゝろひそと夜嵐の底に鳴いてゐる

あるいは嵐の夜にもその声は確かに耳に届く。それは孤独を確かめることでもあった。それが反転して虫がいくら声をあげようとも聴く人のない情景もある。

蟲籠の蟲鳴き誰も居らぬなり

誰も虫の音を聴くことがない、という情景を詠むとき、作者である千空はいったいどこにいるのだろう。この時の作者は、虫籠のなかの虫に完全に溶け込んでいるのではないか。籠のなかに取り残された虫に身を寄せ、あるいはその虫と一体となることで、作者のなかにある孤独がかたちとなる。

虫になる、虫にことよせるといってもそれは単なる擬人化とはいささか異なる技巧である。虫の小ささとそこに込められる象徴性は俳句を単なる叙景から抒情へと深化させ、抒情の質をより深いものにしていく。それは一点を穿つ錐のように句を貫いて、一種の普遍に到達するといえるのではないか。例えば、

天道蟲とびたつ空の深さかな

の「空の深さ」は天道虫が飛び立つ空を平板に詠んだものではない。天道虫になり飛び立つ自我と、そこから離れて天道虫を客観的に空と対比させながら、限りなく小さなものとしてとらえる視点とが同居しているのだ。他にも、

初蝶の二つあひしがためらへり

でで虫の角ふりあてし蔭濃ゆき

水廣くおはぐろとんぼゐて飛ばず

といった句は細密な叙景の句のようでいて、さらにその奥にまで届くような感情の移入がある。蝶にためらいを見出し、でで虫（かたつむり）の触覚に蔭の深さを識る。おはぐろとんぼの静止した姿には水辺の広大さが映し出される。あるいは聴覚と視覚、聴覚と触覚との交錯を読みとることができる次のような句もある。

山川のひゞきに蛍灯を保ち

蚊の聲の夜寒に何かあたゝかく

蛍の灯りは山川の水音の響きに抗するかのようであり、夜寒の蚊の声は単なる羽音ではなく、生命の持つ暖かさへとつながる。いずれも虫に焦点をすえ、それを詠むことで、虫の放つ光や声をとらえるだけではなく、それ以上の何かに迫ろうとしている句ということができる。そしてその何かが千空をとらえた孤独なのである。

その孤独は小さな虫のはかなさや弱々しさと重なるようでいて、必ずしもそれだけではない。千空は身辺の虫たちを

黒き蟻手にのぼりくるうれしさは

刈りし田の蝗は人に飛びつけり

と詠み、相棒のような親しみを感じている。手にのぼってくる蟻の歩みの確かさ、田から思いがけなく人の体に飛びついてくる蝗の勢いが受け止められる。そこには小さい虫であるが故に、かえって強さやしなやかさ、ふてぶてしさのようなものまでを湛えていることが描かれている。

蟻どものうごめく大地ふくらみぬ

遠雷や蛍深々灯りをり

大地や天空を蛾や蛍で切り取る視点は千空の孤独が抒情を経て自然と一体となっていることを示しているだろう。

『千空句帖』の時期の千空は、こうした虫を詠むことで孤独という感情を託していたように思われる。孤独はさびしさや哀しさを生み出すだけのものではない。孤独を意識し、向き合うことで、

ある種の強さや覚悟を手に入れることができる。そこに俳句という表現に出会ってそれをひたすら突き詰めていこうとしている千空の姿勢を見出すことができるのである。虫に孤独を見出し、それを叙景から抒情にまで昇華させる、そうした営みが『千空句帖』には記しとどめられている。

鈴蟲の一つ遠きに眼をつむる

ここでは虫を仲立ちに千空の孤独が自身の内面に深く影を落としていることが、鈴虫の音をとらえることを通してつかみ取られている。この時期の千空にとって虫を詠むことは、孤独と向き合うことであり、それを彫琢していくことであった。

（国立歴史民俗博物館教授／民俗学／東京都）

【作品鑑賞を読む】⑦

煮蜆の一つ二つは口割らず

人間にも強情な奴がいるが、蜆（しじみ）にも、なかなかどうして頑迷な奴もいる。素直じゃない。可愛くない。とまあ、これはもちろん口を割らない蜆のせいでないとわかっているけど、ついつい人間界に擬してとまいたくなるのが、人情というものだろう。滑稽にして、俳味十分。成田千空は、かつて学生時代の私が投句していた頃の「萬緑」（中村草田男主宰）のエース級同人。現在の主宰者である。

（清水哲男）

「増殖する俳句歳時記」１９９７年5月4日から

＊筆者は詩人、元「俳句界」編集長。ネット上に毎日1句掲載。朝日新聞（10月11日）に「『ネット歳時記』を終えて」寄稿。

回想の成田千空

六月の岬

兼平一子

藁葬る火よ迅雲の西津軽　　成田千空

この一句は、成田千空氏の第一句集『地霊』に収められている。

成田千空氏に始めてお会いしたのは、平成元年ころであろうか。地元の新聞（陸奥新報）に文章を連載している時で、その取材のためであった。

千空氏は五所川原市大町で書店を経営しておられた。古書の壁にかこまれて取材に応じてくだったのだが、まるで書斎にいるような雰囲気であった。いや、実際に千空氏にとっては、そこは書店であると同時に書斎だったのであろう。千空氏の俳句はここから生まれたのだから。

新聞連載は、当時、古今短歌会の同門であった中村キネさんとの共同執筆で始まったのであるが、内容は青森県の風土、行事、生活習慣などを詠みこんだ県内外の作者の作品を広くとりあげるというのが条件のひとつであった。成田千空氏の作品として私が選んだのが掲出の句であった。

かつて、藁は米作りの副産物として大事に利用された。軽くて暖かい藁ぐつ、縄やむしろ、コダシなどの背負い籠の材料、冬の野菜囲いにも欠かせないものであり、畳床にも利用されたという。取材の間に、私自身の子供時代の情景がよみがえり、風土への意識に改めて目を向けさせる大切な機会になった。

成田千空氏は、東京で仕事に就いていたが、病いを得て療養中に青森空襲に会い、母の郷里である五所川原へ引き揚げる。そこで、雨に打たれてざわめく青田の広がりを見たとき身内から湧きあがる力を感じたと言う。そして生まれたのが〈大粒の雨降る青田母の故郷（くに）〉であった。

「私にとって転生の一句になった。」と、力強い語調で千空氏は語られた。風土への思い、戦争否定の思いを胸に刻んだという。

夫、兼平勉が、平成十七年に第一歌集『水の連鎖』を上梓した時、青森師範学校の恩師でいらした小野正文先生と、青森県文芸協会理事長の成田千空氏に祝辞を戴いた。

小野先生からは「歌の始めに万葉集を学んだこと、歌の道ということを大切に詠み続けてほしい」との言葉を、成田千空氏からは、「思惟と感性の一体化した作品である。時代の良心としての歌を詠み続けてほしい」との言葉があり、更に「忘れ難い歌人である鎌田純一氏に『水の連鎖』のなかで出会えたのはうれしい」と結ばれた。

著者、兼平勉は「日野原重明博士提唱の新老人の年齢で処女歌集を出版できたことを大切に考えている。――まだ生まれない未知の私に会うことができるかもしれないとそんな楽しみをもって詠み続けたい」と謝辞を述べた。七十六歳での第一歌集出版を高齢のお二人に祝われながら、夫は少年のように含羞を浮かべていた。

夫は、平成二十六年に急逝したが、この時のお二人の祝辞を、大勢の方々から戴いた感動を、亡

くなるまで大切に考えていた。
夫にとって人生の師とも言うべきお二人は同じ平成十九年に逝去された。
小野正文先生は九月二十一日に。
優しすぎる小野ぞと太宰の評せしをわれは恋(こほ)しむ撓ふ言葉を　兼平　勉
成田千空氏は十一月十七日に。
恃むべき一樹亡き街かたむきて胸つきざまに来る寒しぐれ　兼平　勉

深浦町行合崎が野草の宝庫であることは、以前から耳にしていた。しかも、そこには成田千空氏の句碑があるという。ぜひ、訪れたいと願っていたのが実現し、平成二十二年十月初め、長女の車で家族四人揃って出かけた。しかし、探しても探しても見つからない。それほど広いとも思われない岬なのに、家族全員で探しまわったが見つからないうちに日が暮れかけてきた。次回を期すことにした。
行き合へぬ行合崎の秋雨に成田千空句碑はまぼろし　兼平あゆみ
突端に立てば寒さへ向かふ空　ニッコウキスゲの咲く頃に来ます

そして翌年六月、句碑建立に関わったという草野力丸氏に位置を教えて頂き、ついに探しあてた。句碑は慎しく、草に埋もれていたのである。黒御影石の品格ある碑面に刻まれていた句は、
行き合はん岬は草の花だたみ
私は、しばらく言葉もなかった。この岬にこれほどふさわしい句があるだろうか。エッセイ集『俳句は歓びの文学』(角川学芸出版)の中で千空氏は「代表句として残るのは特色と普遍性が一体化した恵まれた句といっていいであろう。」と書いておられる。〈大粒の雨降る青田母の故郷(くに)〉のように、この句も「恵まれた句」と言えないだろうか。目の前のつりがねにんじんの花に触れながら私は時の過ぎるのを忘れていた。
六月の岬は背なをそらしつつ一基の千空句碑をのせたり　兼平一子
(「悠」短歌会代表／つがる市)

中村草田男句碑建立まで

西谷　ともえ

昭和二十九年の第一回萬緑賞を皮切りに第二十八回俳人協会賞、第三十二回蛇笏賞、第十六回詩歌文学館賞そして第一回みなづき賞受賞と俳句の賞で取らなかった賞は無いといわれるほど俳句界を総ナメにした千空さんであるが、受賞を表だって喜ぶことはあまりなかった。そんな中で平成十六年の第一回みなづき賞受賞については例外で、その喜びを奥様の市子さんに語ったという。みなづき賞は同人誌「件」のメンバーが毎年六月に俳句に関わるよい仕事をした人を顕彰する賞である。千空さんがこの賞を特別に思ったのは、その受賞理由が自身の俳句にあるのではなく、師、中村草田男句集『大虚鳥』と中村草田男『俳句と人生講演集』(共にみすず書房)の出版活動に対する業績にあったからである。
草田男は生前八つの句集を出版しており、第八句集『時期』は昭和五十八年、草田男が亡くなる直前に刊行されたが、昭和三十七年までの作品しか収録されていなかった。その後約二十年にわたって発表された句は五千余り。それらの句は中村草田男全集第五巻には収録されたが、句集としては発行されなかった。千空さんが代表を務める萬緑運営委員会では草田男生誕百年を迎える平成十三年、第九句集として刊行する計画を立てたのである。同時に講演集『俳句と人生』、草田男エッセイ集『子規、虚子、松山』、草田男編の子規文集『俳句の出発』の刊行も計画した。これら三冊は平成十四年にいずれもみすず書房から刊行したが、句集には更に一年かかった。五千余りの句から七百六十五句を選び、その中の句から『大虚鳥』と名づけ、平成十五年の刊行となった。この年は草田男没後二十年にあたったため、萬緑運営委委員会では、結果的に没後二十年事業とし、命日の八月五日の発行とした。
これ以前にも千空さんは師、草田男の顕彰活動をしており、その一つが、青森県立図書館〝文学の小径〟の中村草田男碑(平成九年七月除幕)である。
平成八年の萬緑全国大会で「萬緑」五十周年記念事業の一つとして青森に草田男句「玫瑰」の句碑建立を決定した。運営委員会は、千空さんを筆頭に、平井さち子氏、萩原季葉氏、奈良文夫氏、服部健氏、会津正治氏、葛西仙三氏、福士光生氏

を委員とする句碑建立委員会を結成し、建立地、碑石・作品の選定、工事契約等にあたらせた。並行して「萬緑」紙面で五十周年記念基金の受付をはじめた。このほど千空さんをはじめとする萬緑の皆さんと、県とのやり取りを記した文書のコピーが見つかったので記録のためにここに書き記しておく。

平成八年十二月三日、千空さんは小野正文氏と福士光生氏と三人で青森県知事木村守男氏を訪ね、青森県立図書館〝文学の小径〟に草田男碑建立をお願いに行った。〝文学の小径〟は近代文学館長小山内時雄氏に相談した時に候補として浮上した。先に合浦公園が候補地として上がっていたが、青森市に申し入れたところ「立てる余地はない」という回答を得たという。

十二月五日、教育長松森永祐氏から生涯学習課に指示があった。その内容は次の三点であった。

一　知事に、小野正文氏、成田千空氏らから〝文学の小径〟に中村草田男の句碑（はまなすや今も沖には未来あり）を建立したいと申し出があったこと。

二　設置費用は設置者側が負担すること。

三　著名な俳人でもあることから、設置することにより人も集まるだろう。周囲にはまなすを植えるなど、その他手続き等で支障がなければ協力してやって欲しい。

翌年一月九日、千空さんは福士氏と教育長を訪ね、経緯を説明した。その際、設置場所として東京、札幌、青森の候補地があったが、千空さんが手を挙げて青森に決まったと言うことも話されている。この面会の時に教育長からは「この計画に教育委員会として協力したいので、計画を進めても良い」と言われ、四月二十三日、千空さんは、福士氏、葛西氏と現地を確認した。

青森県の土地を青森県人ではない草田男の碑を建てるために使うのはハードルの高いことである。生涯学習課では建立の理由を考え、用地占有の手続きに入るのだが、それに千空さんが協力している。レポート用紙五枚にわたって、草田男の経歴、草田男と青森県俳壇の関係、青森と、草田男の育った松山との俳句上の関係、「玫瑰」の句についての説明が書かれている。

青森県俳壇の関係では、草田男が、戦後、「萬緑」を主宰し、千空さんをはじめ、川口爽朗、米田一穂、寺山修司らを育てた事に始まり、昭和二十六年の県俳句大会と三十三年の萬緑全国俳句大会での二度の来県にふれ、結社を越えて青森の俳人たちが草田男の名の下に集まったことから、青森県における草田男の重要性を説いた。

草田男句碑（左）と、見守る千空さん夫妻
（青森県近代文学館提供）

また、草田男亡き後も草田男の精神を受け継いだ「萬緑」で学ぶ者が多く、全国会員一二〇〇名のうち県内会員が九〇名に及ぶことを記した。

青森と松山の俳句関係と題した章では、明治二十五年の陸羯南と正岡子規の出会いから始まり、二十九年の佐藤紅緑、木村横斜が子規の俳句をそれぞれ弘前と青森に伝えたこと、大正十二年に、増田手古奈が高浜虚子の指導を受け「ホトトギス」同人となり、昭和六年帰郷して「十和田」を創刊したこと、そしてこれらによって写生俳句の伝統的な基盤が本県に形成されたと述べた。また、松山では青森以上に陸羯南を讃仰しており、それは、近代俳句の原点たる子規が、羯南の思霊によって生かされた存在だからだと書いた。

県とのやり取りを記した文書のコピーにはこの他、碑石の材質や形状、建立費用などが書かれた「句碑建立計画概要」と除幕式の要項が綴られている。

平成九年「萬緑」十月号には蝦名晶子氏の除幕式及び吟行会の報告が掲載されており、また、萬緑青森支部の「未来」平成九年八月号に「千空さんの中村草田男句碑三句」と県との間で贈与契約書が交わされ、万事つつがなく終了した旨報告が掲載されている。県では「贈与契約書」等の重要な文書を除き、様々なやり取りの原本は恐らく保存期間を過ぎて処分されたことと思う。近代文学館にあった文書コピーはごく一部と思う。一連のやりとりはこの碑建立に関わった多くの方々にとって記憶に新しいことと思う。関係各位には補足をお願いしたい。

（青森県近代文学館文学専門主幹・副室長／青森市）

―永住の地五所川原　成田千空をめぐる人々(7)―

飯詰時代の意義（二）
俳句とともに生きる

齋藤美穂

一　帰農時代の本義

二十四歳で敗戦の地に立った千空さんはその後六十年余り俳句一筋の人生を送りました。その中で、それから五年余りに及んだ飯詰村での帰農生活は千空俳句にとってきわめて重要な意味を持ちます。前回は千空さんと村の人々とのようすをお話しました。そうした農作業の傍ら、千空さんはどのように俳句と向き合っていたのでしょうか。

戦後の窮状で句会へ赴くことも困難であり「実際には俳人との交際を忘れた歳月といってもよい」という飯詰時代。それは図らずも「自分にとって真の俳句とは何か」の問を深める時間をもたらしました。俳人との交際は絶たれても、俳句が頭から消えることはありませんでした。他の誰にも見せることのない孤独な時間を耐え得る強さはどこからきていたのでしょうか。晴れた日の農作業と雨の日の読書、そして俳誌への投句を続ける中で千空さんは一筋の道を見出していきます。それは自分の真の俳句を作るためには「人間としていかに生きるかが何よりも大切」だという、その一点に辿り着くまでの道程でした。この時代に得た千空俳句の魂とも言うべき一点は生涯において揺らぐことなく、後に選者としての重要な視点にもなりました。

二　俳句活動の手がかり

昭和二十年七月二十八日、死傷者千人以上を出した青森空襲の前夜まで句会に集っていた青森俳句会の同人らは空襲警報で散り散りになりました。しかし昭和二十一年二月にはいち早く同人誌『暖鳥』を創刊します。一方、千空さんが早くから惹かれるところのあった中央の俳人・中村草田男が同年十月に俳誌『萬緑』を創刊。この二つの俳誌と遺された日記を併読すると千空さんの帰農時代の内なる葛藤や俳句と向き合う一途な姿勢が見えてきます。

「萬緑」創刊号　昭和21年10月（右）、「暖鳥」5月号　昭和22年（左）

今年は大いに畑をつくる積りで居ります。働いて〳〵流れ出るその汗の中から何とか眞の自分の句を生みたい念じてゐる。成田千空

（『暖鳥』創刊号）

『暖鳥』の創刊号に並ぶ同人たちの意気込みの中でも千空さんの所感にはすでに「真の俳句を生むためには働いて汗を流す」必要があるとの認識があります。しかし、想像以上に地道な農作業に折れそうな心が日記には綴られています。昭和二十一年の日記を抜粋します。

四月二十六日　畑打のこつ知る…いっしんに畑を打つ。恐しいほど単調な仕事である。少しでも複雑にしようと思って、横に打ったり、縦に打ったり、段をつけて打ったり、様々にやってとうとう打ち終る。

五月七日　山へ行ってひとりで働く。働いてゐるときだけが私の安息だ。休んだら最後憂うつの虫があばれ廻ってやりきれなくなってしまふ。

五月十四日　私は本当を言へば虚無で、そして誰よりもエゴイストなのだらう。

慣れない農作業に対して身も心も思うようにはいかず、やり方や考え方を変えてみたり、自分は利己主義なのではないかと自責してみたりと模索の日々、千空さんは次第に労働と文学の有機的なつながりに気づいていきます。この頃『暖鳥』に発表した論文には真の自分の俳句を生み出すためのこだわりが強く表れています。

斯うなると〝内〟は俳句のいのちになってく

る。だからその〝内〟の修練は當然超術的な人間の修練に通ずると考へられる。

（『暖鳥』第三号「内なるもの」）

同年三月発行の『暖鳥』には作品三十句を発表し旺盛な創作意欲を示しました。また翌号の論文には、

我々の俳句は、最も象徴性を有する故に、又、最も現代に生きる可能性のある文藝ジャンルだと云ひ得るのではないか。……「俳句を何とかしよう」とする前に、先づ「この人間をなんとか」しなければならぬと考へざるを得ないのである。（同誌第十二号「俳句・象徴・人間」）

と述べています。これらの言葉の裏には飯詰村で「人間の修練」に日々奮闘している若き千空さんの姿があります。飯詰時代の『暖鳥』への投稿論文は千空さんの実践報告であり、その内容の切実さに同人らの間には千空さんの本気度が伝わっていったのではないでしょうか。私は以前青森市内で偶然、当時の同人のおひとりとお会いしました。大正十三年生まれの尾崎西蕉さんは千空さんについて「すごい人です。知識もある。俳句を見れば千空さんの俳句はわかるほどでした」と語っておられました。入会当初は聞き手として句会に参加していたという千空さんは、この頃になると句会に参加せずして次第に次代を担うホープと目されるようになっていきます。しかしそれは千空さんにとって喜びではなく、少し寂しいことであったようです。

六月十六日　午後ほとんど一年ぶりで、吹田氏を訪問。奥さんに会ってくる。話、砂とうのどっさり入った煮豆とコーヒー。（略）誰れもかれもみんな世間並の大人になってゐる。

久しぶりに青森へ出掛け、新刊書や映画を目にしたり、懐かしい仲間と再会して過ごしますが戦後の新時代を迎え、距離のできた同人らとの温度差を感じ始めていました。

一方『萬緑』への投句は草田男の指導を受けられる喜びが大きく、日々の暮らしや地元の俳句会から得た力を試す場となりました。創刊号から欠かさず投句を続け、昭和二十二年『萬緑』第七号の作品欄に初掲載を果たします。千空さんの代表句となった「大粒の雨降る青田母の故郷（くに）」は、昭和二十二年十一月発行の『萬緑』で草田男選となり選評が掲載されました。次第に「青森の成田千空」は出色の俳人として草田男に注目されていきました。翌年一月号にとうとう作品欄の巻頭に登場し、その作品評は三ページにも及びました。

青森　成田千空

空蝉の脚のつめたきこのさみしさ
炎ゆる砂地掠めしつばめ懐かしや
大望に遠く杭ぜに菜屑溜る
父の日の餅あしつよき餅をつく
父の日の夜に入る煖爐赤くしぬ

草田男は作品評の中で「作品の表面で悪戦苦闘してゐるやうなアガキがなくて、しかも俳句プロパーに決して墮としてゐない、中心から發する氣力と、一種のうるほひとがある」と前置きし、俳句を通して千空さんの内面に迫りました。そして「巻頭句であっても、一人の作品にこれだけスペイスを割いたことは珍しいのであるが、たまには一人の作品を素材として、いろいろに解剖、分析してみることも、自他の研究に資することともならうかと思つたからである」と結んでいます。

千空さんはエッセイ集『俳句は歓びの文学』の中で「草田男の評は句の核心をとらえて、肉迫するすごい評でした。作者の私から見れば、殆ど生き写しの精確な評で、その想像力におどろくばかりでした。のみならず、発想では意識しなかった、俳句の二重性が示されたことで、俳句とは何かをさとることができました」と述べています。草田男と千空さんは一面識もないうちに、誌上で決定的な出会いを果たし、それが生涯の師弟関係へとつながっていったのです。

【千空点描】

兜太と千空

金子兜太が今年、第70回青森県俳句大会の特別選者に招かれた。兜太と千空は、相手を認め合ったライバルであり句友だった。

「特別選」地位に入選句の、兜太評。

青田波青田の沖に千空師　弘前　桜庭恵

「私は（成田）千空が好き、「青田波青田沖」に千空は必然ではないが、千空を尊敬している人間が千空で遊びの句を作れるのは青森だからこそ」。

そして特別ゲスト、黒田杏子（ももこ）との対談。

「八戸の豊山千蔭氏のおかげで青森との縁ができて、さらに成田千空という優秀な俳人と付き合い、青森県のいいところを、いい俳人と出会うことによってしゃぶらせてもらってきた」。

（東奥日報紙から）〈佐〉

三　俳句への手応えと帰農生活

俳句の活動で自他ともに手応えを感じ始めた飯詰生活の二年目にはどんな変化があったのでしょうか。この頃の心境を日記にはこう綴っています。

四月二十四日　全身をぶちこんで、神が余に与へたものを忠実に果すだけ。この神が与へたものが何ものであるか余は余の中に見出さうとしてゐる。これが今の状態である。

五月七日　畑へ出る。いっしんに働く。何かしらとても豊かな安らかな気持である―こころよく我に働く仕事あれ、のその仕事を得た感じである。

五月八日　畑打、下肥擔ぎ。あはれ、下肥をちっとも穢いものと感じなくなってしまった。

六月七日　としまさの家の田植に手伝いにゆく。ずっしり重い苗を背負って濡れた畦の上をぴたぴた歩いて、ひどく愉快であった。（生きものを植え育てる）といふ大きな愛の明るさが、自然と一つの雰囲気をつくってゐるのかもしれない。）岩木山がきれいであった。

六月二十六日　この頃じぶんでじぶんの感受性の敏くなったのに驚く。ぴかっと来るものに驚く

四　作者の生活に想像をめぐらせること

奥田雨夕

人の家継ぐ身二月の凍てきびし
梅雨入りの村の起伏に立つ炊煙
赤い毛の靴履き得たる子の歩幅

五所川原俳句会から刊行された最も古い句集『もがり笛』（昭和三十五年）は、いずれも三十代の若さで亡くなった会員三名の遺句集です。そのうちの一人、奥田雨夕は飯詰在住で後に村の公民館主事も務めたことから、千空さんとの縁が深い俳人だと千空夫人は懐かしみます。千空さんは俳人にとって句集の刊行を重く見て数多くの句集の選句や序文に力を注ぎましたが、おそらく千空さんにとって初めての跋文であろう『もがり笛』の扱いは特別なものに感じられて仕方がありません。

手帳の片すみや、雑誌の余白や、事務用紙の片はしなどに書きとめられたものが、上手下手はともかく、生活の中の声を伝えているように思われた。彼らは俳句作者である前に、じつに汗みどろの生活者であつたことはあきらかである。（略）俳句は彼等にとって等閑の具ではなく、生活の渦の中にひらめいた、ある日ある時の誠意の声であつたことは疑う余地がない。（略）この『もがり笛』一巻を、所謂俳壇に伝えるより、彼等を知りながら、彼等の俳句を知らないでいるこの地方の人々に伝え、彼等の心を受け継ぐ人がこの地方から一人でも多く現れることを祈りたい気持である。　（遺句集『もがり笛』後記　成田千空）

文学という行為の根本を見ての言葉が胸を打ちます。「俳句が作者の誠実な生活の声であること」「句評は作者の生活に想像をめぐらせること」は、飯詰時代に自身がもがいて得た答えであり、真摯な選評は句作と同様に俳人として重要な務めであることは実感をもって草田男から学んだことでした。

五　飯詰時代の日記『鏡』

今回文学館で閲覧した日記（昭和二十一年四月二十六日から昭和二十二年七月二十二日　大学ノート一冊）は表紙に『鏡』という題がついています。この日記は次の文章で終わっています。

七月十四日　僕は二年間、百姓をやって、こういふ発見をした。百姓にとっては大地は鏡だといふこと。畑打。種蒔。植物の生長。なんとそこには正直な自分自身が映ってゐることか。どんなにごまかさうとしても絶対にごまかせないのである。白日の下に、まざ〳〵と自分自身の姿が展開される。貧しければ貧しいなりに一点のくるひもなく春、夏、秋とすゝむにつれて、いよ〳〵はっきりと大地に印せられる。誠実の本当の意味を知りたいものは、鍬をとって大地を耕してみるといゝ。芸術はある場合、人の眼をごまかすことも可能である。然し、百姓仕事だけは、どんな低級な人の眼をもごまかすことが出来ない。百姓仕事には偶然がない。百姓にとっては、大地は鏡だと同様に芸術家にとって作品は鏡でなければいけないのだ。

大地を鏡として生きる人々から学び、そこから生まれた渾身の俳句をしっかりと受け止めてくれた師・草田男との邂逅があった飯詰時代。千空さんは昭和二十五年、書店開業に乗り出します。草田男による評価と期待が高まる中、自分の納得する句を見失わないよう俳句の道は険しくなるばかりでしたが、若き千空さんは俳句とともに生きることを自身に課し、前を向いて歩き始めたのです。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

私が「成田千空論」を書けない訳

石崎志亥

私は大きな間違いを犯していた。そのことには、原稿締め切りが迫る今月下旬まで気がつかなかった。我ながら何とも忌々しい限りだ。身の程も弁えずに「成田千空論」を書こうとした浅はかさを、今は後悔している。

私は、実は成田千空さんには一度もお目に掛かったことがないのである。逆に、そういう立場から、一俳句愛好者の目で見た俳人・成田千空論も一味違って面白かろうということで、千空論を書くことになったのである。夏の盛んな頃の話である。ところが、締切り間近になってのこの体たらく。自分がとんでもない勘違いをしていたことにようやく気がついたのだ。愚かであった。私はどうやら世間話程度の千空論を書いて、お茶を濁すつもりでいたようなのである。そんな安易な気持ちで千空論を書くことを安請け合いしていた自分に冷汗三斗。混乱した現実を目の前にして、愕然とし、自己嫌悪に陥った。

そもそも生前の千空さんと何の接点もない輩が本当に俳句界の高峰・成田千空を語ることができるのか。千空論を書けるのか。最初に私の脳裏を掠めた疑問と不安である。そのモヤモヤが結局は最後まで、ずっと尾を引き、私を苦しめることになった。

確かに、今日日、俳人に限らず、作家など多くの人たちが芭蕉論を書く。蕪村論も一茶論も書くし、子規についても書いているではないかとは思う。しかし、至極当たり前のことなのだが、芭蕉も蕪村もそれらの作者とは同時代人ではない。言うまでもないことだが、彼らは江戸、明治の時代に活躍していた俳諧師、俳人たちなのである。隔世の現代人が遺された資料を手掛かりに、矯めつ眇めつしながら、およそ柵のない、ある意味無責任な環境の中で、芭蕉らについて、熱く語り、独自の俳句論を展開しているのである。それを、私は一度も聲咳に接したことがないという一見尤もらしい理由だけに寄り掛かり、成田千空という俳人を語り、身勝手な総括をしようとしていた。持ち合わせの貧弱な知識を頼りに、千空さんを皮相的になぞろうとしていた。世間話程度の千空像をあれこれ書いて、千空論に代えようとしていたのである。何という姑息、浅慮であろうか。巨星・成田千空に対する非礼この上もない大罪であると言わずばなるまい。

千空さんは、今年十一月で没後九年になる。ご家族はお元気でいらっしゃると伺う。関係の方々もおいでになる。千空さんの薫陶を受けられた方々は、皆、口を揃えて優しくて温厚な先生であったとそのお人柄を褒め、懐かしむ。俳句大会などでも、「千空」の文字を詠み込んだものやテーマにした句は珍しくない。慕われていたお方であることは疑うべくもない。シンパシーが半端ではなく、未だに衰えていないのである。直接指導を受けた結社等の俳人たちにとっては、おそらく、千空さんは、今なお神のような存在であろう。そういうことを見聞きするにつけても、甚だ不遜な言い方になるが、千空論を書くには、千空さんはまだまだあまりにも生々し過ぎるのである。千空さんは、今でも、濃密なオーラを発し、神の如く結界を張っている。他者の闖入を拒むのである。それは、大部分は、千空さんの責任とは言えないものだとは思うが、ことほどさように、諸々の柵が多いということなのである。それらを承知の上で千空論を書くということであれば、どうぞ書くがよろしかろうということになる。

しかし、前述したようなことも含めて、私には、千空論を書くことを躊躇させるものがあまりにも多い。それも、その引っかかりが大きくて深い。かつて、私が俳句結社の老舗「萬緑」に属していたという物理的な理由だけではなく、敷衍して、そこに集う人たちのことも大変気になるのである。それらの諸々が、私が千空論を書くに当たって、二の足を踏む大きな理由になっている。文字通り、今は越えられない柵なのである。仮に書いたとしても、きっと当たり障りのない中途半端なものになることは必定。肯定的なイメージが少しも湧いてこないのだ。おそらくは、誰にも歓迎されず、ほかならぬ私自身が満足することもないに違いないのである。

このような状況の中での千空論は、やはり無理だと思う。また、例えば、中村草田男の評価を受けた最初の句で、千空さんの代表句と言われている〈大粒の雨降る青田母の故郷〉一つ取ってみても、私は非常に情緒的、抒情的な句で、草田男の標榜する思想詩からは随分と遠いと思っている。

そのことが一概に悪いということではないにしても、仮に、千空論を書くとなれば、それらについても、多方面から言及することが求められる。千空論を書くということは、そういうことなのだ。極め付きの自論を展開するということなのである。論考には、多くの反論もあると思うし、その時は、私もそれらの一つひとつに果敢に応戦したいとも思っている。そのような理由で、やはり、今、千空論を書くことは難しいと思うのだ。正直に恥を忍んで言えば、何のことはない。なんだかんだ理屈をつけてはいるが、結局は私自身の力不足に尽きるということだ。

現代に生きる我々が、今、近世の芭蕉を論じる場合と、現代の千空さんを論じる場合は、どうみても同じ次元のことではないような気がする。こういうことは、時間の重みの支配が大部分を占める。要は、千空さんを論じるには、今の私はあまりにも臆病に過ぎる。十年後なら、何とか細やかな千空論は書けると思っている。少しは環境が変わっているかもしれないと楽観視しているからだが、いつかは書きたいし、書いて置かなければならないことだと思っている。勿論、現時点で可能な範囲内で書いて置くことにも意味があるとも思うが、今は、気持ちがついて行かない。飛び込む勇気もない。機が熟すまで、猶予願いたい。

ところで、私のような考えの下に、千空論に手を着けられないでいる御仁は結構沢山いるのではないかと思う。後年、千空さんの没後二十年とか三十年とかになれば、つまりは、ある程度の時間が経てば、千空論があちらこちらから何本も出てくるようになると思っている。特に、結社等お膝元におられた俳人諸氏には、遠慮せずに、どんどん千空論を書いていただきたい。俳句の世界に遊んでいて、折角の千空さんとの邂逅を得たのである。同時代に生きた証として、絶対に書くべきだと思う。身近だった方々は資料も多く、書くべきことも沢山あって、挑戦は、容易なはず。私はそう思って疑わない。

繰り返しになるが、老婆心ながら、一言付け加えれば、やはり、千空論を書くに当たっては、「千空先生」とか「千空師」などと敬称をつけて奉っているようでは、まだまだ駄目なのだ。既に、そこには、何らかの遠慮が働いていて、筆者の眼を狂わせるだけではなく、自然と匙加減が働き、脚色するような筆致に陥る恐れもなしとはしない。周りの目も気にもなる。それでは、奥歯にものの挟まったような、如何にも中途半端な千空論にしかならない。作者自身も到底納得はゆかぬはずだ。冷徹で、温和で、覚めた目が必要なのだ。少し考えれば、誰にでもすぐに分かることだ。それに、その程度の千空論では、泉下の千空さんは決してお喜びにはなるまいとも思う。言うまでもないが、千空山脈に切り込むには、相当の覚悟と洞察と快刀乱麻の潔い筆力が必要なのである。

千空さんが惜しまれて亡くなられた頃、私には、残念ながら、俳人・成田千空についての知識が殆どなかった。というより、還暦過ぎに俳句を始めた私は、まだ、俳句の門すら叩いていなかった。俳句の手解きを受けるのはその半年後のことになる。ただ、面白いことに、やはり俳句には関心があったのであろう。『千空歳時記』(矢本大雪編、二〇〇二年、青森県文芸協会出版部刊)を買い求めていた。今から十四年前、私が俳句を始める六年前の小さなエピソードである。

それに、私は、幸運にも、千空さんの逝去後、地元紙に三回に亘って掲載された千空さんの追悼記事、福士光生さんの手になるあの追悼文を読んでいた。内容については、残念ながら詳らかではないが、千空さんが、俳人協会賞、蛇笏賞を始めとする数々の受賞歴を誇り、萬緑選者、読売新聞俳壇選者を務めるなど、俳句史上に燦然と輝く高名な俳人であることと、青森県にもこんなにすごい俳人がいたのかという驚きは、今でも鮮明に残っている。巨星墜つ、の感が強かった。今にして思えば、光生さんが認めた追悼文は、「成田千空論」だったのだと改めて思う。後日談になるが、あの追悼文について、光生さんに聞いたことがある。光生さんは、一言、「あれは、甘かった」と小声で述懐していた。

千空論を、私が何故書かないのか、或いは何故書けないのかという理由を、あれこれ他愛もなく書き連ねてきたが、見苦しい言い訳はこのくらいにして、この辺で、この拙稿の舞台から退場させていただくことにする。

最後まで、甚だ勝手な言い回しになるが、今回の拙稿は、私としては、所期の達成感も得られず、悔しく、残念であったと言うしかない。忸怩たる思いを悪戯に積み重ねた三か月であった。自業自得の極みと言うべきか。

格調高い「成田千空論」を出稿するつもりで勇んで臨んだにも拘らず、力及ばず、結局は叶わなかった。結果的には、レベルの低い言い訳に終始した駄文を曝すことになってしまった。大変申し訳なく思う次第である。

津軽の秋もいつの間にか終盤を迎えた。

〈俳人協会会員／弘前市〉

師・中村草田男の千空句評 ①

『萬緑』昭和23年1月号「作品欄批評」から抜粋

成田千空氏の作品を巻頭とした。ゲラ刷や、控への寫しなどが目下手元にないが、たしか十一月號に於ても、此人の作品は出色であつて、かなりの數を採錄したとおぼえてゐる。作品の表面で惡戰苦闘してゐるやうなアガキがなくて、しかも俳句プロパーに決して墮してゐない、中心から發する氣力と、一種のうるほひとがある。

空蟬の脚のつめたきこのさみしさ

一應至極單純な句のやうに見える。意味も解說を必要としない程に自明のやうに見える。それでゐて、作品其物のきめはなかなかこまかく、作品として占める類別的性質も、決して、ひととほりに、かたづけてはかゝれないところがある。夏以來、そこいらの木の枝や葉かげなどに澤山附着してゐて、眺めて珍らしいとも思はなかつた空蟬を、季節すゝんで大氣、個物すべてが、つめたくなつたときに、ふと、今更ながら手にとりあげてみて、それが伴つてゐる其脚のつめたさを、はかなしと感じてゐるのである。（近頃、俳句に於て季題を保持してゆくことの必然性を否定しようと努める人達が、却つて、わざわざ傳統俳句陣の人達よりももつと形式的に、所謂「歳時記的さだめ」を鐵則のやうに判定標準として立てて、有季派の作品を吟味してみて、其季感の有無を問題にしてゐることがあるが――季題は、根本原則としての必然性にこそ意味があるのであつて、それから振幅性を全然取除くことは愚かである。詩業といふことの意味と性質とを、正しく理解してゐた正岡子規は、すでに此季題の運用の問題に於ても、正しく寛容であつた。此の句に於ても、空蟬が夏の季題であることが此句の情緒、氣分成立には搖るがすべからざる基盤となつてゐる。しかも、實際の事實として取上げられてゐる時期は晩秋、初冬である。それでゐて少しも差支へはない。）空蟬の體の大部分は、薄い膜のやうなもので出來上つてゐる。たゞ六脚の端の部分だけは、厚味があり、堅く、殆ど空洞でない程に角質で充實してゐて、その上、尖端が爪になつて鋭い。だから、其、思ひ切つてこまかく鋭くなつた六脚の端を同時に一とそろへにして手の甲の上に置けば、かすかながらに、却つてハツキリとかすかならぬ刺戟として、つめたいのである。「空蟬の脚のつめたきさみしさよ」などと、リズムが弛緩しないで「このさみしさ」となつてゐるのは、わざわざ佶屈にして奇をてらつたのではなくして、其瞬間の極度に微かな、極度にハツキリとしたつめたさの實感を如實ならしめるための手段である。皮膚の表面全體に大氣から受けてゐる「つめたさ」が、六脚の端によつて、最も纖細に刺戟されて、最も纖細に自覺されたのだ――といつてもいい。しかも、此句には、おそらく其成立上に一つの秘密がひそんでゐる。「空蟬の身」といふ場合の枕言葉的用語を、其儘に實體語として利用してしまつたとも考へられるからである。即ち、「空蟬の脚の」は「空蟬の身の脚の」の言語的役割をつとめてゐるのであつて、此句は、今まで說明してきたやうな意味以外に、作者自身の、所謂「なま身」「生き身」の、はかなき脚のつめたさ（冷え）を「さみし」と觀じてゐる氣息をも同時に含んでゐると解しても、鑑賞理解として、差支へないのである。對象となつた素材の具備する世界と、相對つた作者の內藏する世界とが、ダブル、エクスポオヂユアといつては機械的說明に過ぎる――彼我、不斷に相通ひつゞけてゐるのである。此種の詩界は、是非の論理を越えて、すでに芭蕉によつて、立派に實行されてゐる世界なのである。（此事についての、現代俳句に於ける意味などを、ここで論じ初めたら、際限がなくなるから、ほんの暗示としての一語を漏らしただけで、今回は打切りにする）

炎ゆる砂地掠めしつばめ懷しや

此句も、「炎天の砂地掠めしつばくらめ」などと表現したと假定した場合とは、一句の性質が本質的に違ふのである。「懷しや」の實感は、「季題的」に春以來の燕であること、それが炎天の眞晝に至つても衰へず、いさぎよく氣力の旺盛な動作をしてゐる有樣そのものが呼びおこす實感である。前句で「はかなさ」が「さみしさ」になつたやうに、此句では「いさぎよさ」が「懷しさ」になつたのである。一方、「懷しや」は、作者の側からいへば、ひらめいて直ちに姿消え去る燕への瞬間的追想であり、作者自ら、その極度にはげしい反射と、くるぶしを燒く熱さとを、壯快と受取りつゝも又それだけの抵抗力として意識しつゝある砂地へ、つばめが、共通經驗に自發的にあやからうとするやうに、掠めて通つた、其事に對する親近さの情でもある。

大望に遠く杭ぜに菜屑溜る

此「遠く」の語の用法も可成り微妙である。常識からいつて「大望に」で意味を一旦切つて置いて、さて「遠く杭ぜに菜屑溜る」だけを意味上の一と塊とすることは不當である。「大望に遠く」だけで一と塊となるべきである。「常識に遠い」などといふ用語例に似てゐるわけである。作者自身が大望に遠く、即ち大望を抱くべき又は完全に抱きつゞけるべき由もなくて、しかも其ことを自ら不甲斐なしとも感じつゝ、水邊にしばしば佇つて眺めてゐると、其處なる、やゝ相密接して立つてゐる杭ぜには、流れ下つてくる菜屑其他が空しく溜つてゆくだけ

なのである。しかも、此句は、作者の氣持を冒頭から詠ひ出した態勢を一應示して置きながら、結局は、眼前の一實景の方が中心であるかのやうな印象を與へきつて一句が終つてゐる。「遠く」が、意味の表現としては「大望に遠く」であつて、しかも、情緒氣分の表現としては、「遠く杭ぜに……」となつてくるわけなのである。「大望」などといふものが確保され遂行される世界は、どこか別天地として遙かな遠方に存在し、ここでは、たゞ日常生活の川での洗ひ物に、上手で流す菜屑其他が、次々と移つてきて杭ぜに溜るだけである――といふやうな、やゝ客觀的なビルトとして、讀者への印象へのこる。「不本意ながらの片隅の安息」――「菜屑」といふものゝ明るい色彩が、そんな氣持をも自然に添へることも事實である。この句のやうな發想が、一種の「このみ」として意識化されてしまふと困るが、此句の場合は十分に實感があつて、ユニイクな境地を樹て得てゐる。

父の日の餅あしつよき餅をつく

父の日の夜に入る煖爐赤くしぬ

父の忌日を詠んだ兩句とも、單純で解りやすいが、空疎でなくて、しをりがある。前の句が純白、後の句が眞紅、さういふ單純色の味ひだが、リズムが、小間切れに、きびきびしてゐる。前句に於ては「父の日の餅あしつよき餅をつく」と整へられてゐるが、少し注意すると、二音、三音の小間切れにしてみる場合、後句は全く前句と一致する區切れになつてゐることが解る。故人である「父」も生時は明朗强健な人であつたらしく、遺族亦、屈托なき生活を送つてゐるらしい氣息が、リズムから感得される。

×

よし、卷頭句であつても、一人の作品にこれだけスペイスを割いたことは珍らしいのであるが、たまには一人の作品を素材として、いろいろに解剖、分析してみることも、自他の研究に資することともならうかと思つたからである。

『萬緑』昭和23年2月号「作品欄批評」から抜粋

流刑囚（アリタン）の馬橇の馬も小鈴ふる　千空

前號の成績の後なので、期待して句稿に接したのだが、やはり何か生得的な獨自なものゝ伏在を偲ばしめはするが、今度の出來榮はあれほどにはいかなかつた。私は嘗て「チエホフ」の「サガレン紀行」を讀み、その紀行に取材したいくつかの記憶に沁みのこるやうな短篇を讀んだことがあるが――此句も、此作者のサガレンでの生活の回想から生まれたものではないかと思ふ。シベリアに於けると同樣に、サガレンに於ても、流刑囚は流謫地の限られた地域内では、可成りに自由行動を許されてゐたものであらう。それの子孫が、現在ではそれも亦日系露人としてなほ同じ地にとゞまつてゐるのであらう。しかし、なにかにつけて、やはり今日でも流刑囚（アリタン）ととなへられて、他の一般露人からは一種の差別的まなざしで觀られてゐるのであらう。歴史は茫々と過ぎつゝも、一方小さな命と小さな現實は、こゝにある――といふやうな感じのする句である。「子規のこゝろ讀みとる指と眼の冴えて」は、必要あつて、子規の文書中から、その定まつた思想を汲みとらうと、一行一行指先で辿るやうにしつゝ所謂「心讀」してゐる場合であらう。表現がそこの場所でやゝ混亂してゐるが、そこに氣分が集中し波うつてゐるとすれば、たいしてとがめるにも當るまい。「眼の冴えて」は、自分が要求し期待したものと「子規のこゝろ」とが果たして一致してゐたことの手ごたへのよろこびのやうなものをも暗示してゐる。

『萬緑』昭和23年5月号「作品欄批評」から抜粋

「樹頭の花」欄の方の卷頭は、また自ら成田千空氏といふことになつた。當方の扱ひやうの手落ちで二ケ月分の投稿を一と時に重ねて發表といふ結果になつたのだが、矢張り粒が揃つてゐた。

分析を經ない以前の對象の生命の業相を、直接に射とめる。

そこにタレントの伏在が認められる。

をのこ子の小さきあぐら年新た

此句などが、雄辯にそのことを自ら示してゐる。或ひは爐邊であるのかもしれないが、室内の可成りにあたゝかくて、幼い子供さへがさういつた寛いだ姿勢をとる、地方生活の一端が描かれてゐるに過ぎないが――それでゐて、小さなあぐらを組んだ姿勢が、一種の安定を得ていない、足頸やふくらなどが可愛く白いのがめでたい感じを呈してゐて、要するに「年新た」とヒタと一體になつてゐる。

「雪解けて屋根が乾けり」と「金欲しや」。「雪原に土よりの杭」と「うらがなし」。此二句も同樣に、以上で述べた實感の直接性を以て飛躍といふあぶなつかしさを伴はない一種の飛躍で結合してゐる。それに較べれば「老人に微笑」と「家鴨に春日差」とは、作品構成の上で、より一般的に寫生のプロセスを踏んできてゐる。そして「鋤の鋲（くぎ）の錆びたる冬も働けり」の一句に於て、最も寫生的な度合ひに達してゐる。といふ意味は、次のやうに説明すると却つて解かりにくゝなるかもしれないが、對象の世界と作者の抒情の世界とが、時處の次元を一つにしてゐるといふ意味である。その句のやうに次元的に飛躍の伴つてゐる作品には、それだけの魅力があり、此句のやうなのには又それだけの强味がある。

「鋤の鋲（くぎ）」――鋲をクギと讀ましてゐるが、鋤の齒金のつけ根近くに深く埋まり込んでゐる、頭に一本縱溝のある「捻（ねぢ）釘（くぎ）」の頭であらう。時候其物は所謂農閑期であつて、鋤などを日毎盛んに使ふといふことはなくて一段

窪んだ「とめ釘」の頭などは自然と錆びてゐるのであるがそんな農具のありさまとは別に主人公なる貧農は依然として一日も休むことなく冬季は冬季なりの仕事を追って働きつゞけてゐるのである。

〈許可を得て転載しています〉

津軽のわが俳句仲間 ―昭和二十年代まで

成田千空

『俳句研究』1993年9月号

昭和十六年の夏、東京の軍需会社に勤務中肺を病んで、故郷の青森に帰り療養生活に入った私は、姉にすすめられて俳句をはじめた。姉の夫は岡田晴秋という俳人であり、その当時はもう亡くなっていたが、私とは従兄弟で、子供の頃から彼が俳人であることを知っていた。私より十六歳年長で夫婦共に小学校の先生をしており、北津軽の村の彼の家へゆくと本がたくさんあった。

その旧家は私の母が生れた家でもあったから、夏休みになると毎年出かけて、何の遠慮もなく何日でも泊って、村の子供たちと野や山や川で遊び、時には本を読んだりレコードを聞いたり、時には宵宮や盆踊りへ行ったりして、心から楽しんだのであった。その原風景が私の長い俳句生活の原点といってよいであろう。

晴秋は札幌の「暁雲」(青木郭公主宰)と青森の「寂光」(高松玉麗主宰)の同人で、自分でも「暁風」という小さな俳誌を出していた。昭和九年、二十八歳で亡くなったが、津軽俳壇では有望視されていたようである。

短夜のまどろみもなき兵思ふ　晴秋
欠食の児等ストーブを離れ得ず

姉は晴秋の蔵書から俳句関係の本を、せっせと私の病床に運んでくれるので、俳書の出版が稀な当時、随分恵まれた出発をしたものだと思う。子規の『獺祭書屋俳話』や『俳諧大要』、碧梧桐の『新傾向句の研究』、井泉水の『井泉俳話』、『自由律俳句』、その他「芭蕉・蕪村・一茶句集」など、彼の幅広い関心がそのまま私の関心になった気味がある。ただ、虚子の本は全くなくて、『進むべき俳句の道』を古本屋で見つけて読んだ。

晴秋は花鳥諷詠より人間的な表現を志向したことが明らかであり、生きていれば新興俳句に接近したかもしれない。彼が遺した資料によって大正から昭和にかけての、青森県下の俳人たちを知ることができた。佐藤紅緑・木村横斜・大塚甲山・矢田挿雲・桂閑村・岩谷山梔子・中市絶壁・中村泰山等である。

日盛や雲湧き出づる岩木山　紅緑
牛の尾の背中に届く落葉かな　横斜
雲遠し田螺の夢の白む時　甲山
酔うて泣くことのよろしき濁酒かな　山梔子
貝殻をひろへば虹のやうな色　絶壁
苔清水樵の通ふ路在す　泰山

晴秋はまた「石楠」にも投句していたので、昭和初期の「石楠」が遺っており、熱心に読んだ。当時の県俳壇では「ホトトギス」のほかに「石楠」の投句者が多く、佐藤流葉・斉藤草村・新岡青草等が注目されていた。県外の俳人では佐野良太と大野林火にもっとも惹かれた覚えがある。林火の添削教室は初心者の私にとって大いに学ぶべきものがあった。

私はまた姉の紹介で、高松玉麗の松濤社に入り、玉麗に師事することになった。玉麗は自ら療養生活中の私を訪ねてきて、月に五句出すようにすすめ、終始にこにこして人当たりがよかった。腰の低い小柄な人で、私にとっては初めて見る俳句のお師匠だが、庶民そのものの感じであった。

その数日後、カンカン帽をかぶった小肥りの人が訪ねてきて、吹田孤蓬と名のった。松濤社の幹事役らしく、句会のことをいろいろ説明してくれた。松濤社では「寂光」という、俳誌というよりもガリ版刷りの句会報を発行していた。二十歳の私が大いに歓迎されたわけである。若者の大半は兵役についた時代であり、また俳句に関心をもつ若者が少なかったと思われる。

孤蓬は毎日のように私を訪ね、俳句や芸術のことを語ってやまないのである。津軽弁まる出しで語る、彼の芸術論はおもしろかった。観世流の謡曲で鍛えられた声量が魅力のある津軽弁となって、口上手ではないがふしぎな説得力があった。私は生家の十二畳間をひとり占めしていて、彼の訪問をしだいに心待ちするようになっていた。

彼は私より十五歳年長であり、しかも京大出身の知識人なので先生といってよかったが、彼は全く友達づきあいの態度であった。京大時代に飯田蛇笏の長男鵬生と同級で、鵬生の影響で俳句をはじめたという。俳句は彼の津軽弁同様、口上手ではないが魅力のある俳句をつくった。俳句の骨法をわきまえた上で自分のことばを自由に生かす作風であった。

暖かや人の手にも熊の手にも指　孤蓬
冬至南瓜叩けばヨシと返事する

昭和十七年の夏、私ははじめて松濤社の句会に出席した。会場は吹田孤蓬の新居で、若い奥さんと新築の木の匂いがする家に十人ほど集まった。三浦寿録・高木石阿弥・田川研二・柿崎流翠等を知り、特に同年輩の研二と親しくなった。

投句した作品を全部模造紙に墨書して貼り出すので、点の入らない句はいつまでも衆目に晒されることになる。

句会というものはなかなかきびしいものだと思った。研二は字が上手なので書き役をやらされ、読みやすいきれいな字をすばやく書いていた。その後、彼とは往復書簡で句を見せ合い、批評し合った。松濤社では期待された人である。

鰯焼く耳の奥から亡母の声　　研二

玉麗は木村横斜（東奥日報主筆で日本派の俳人）に早くから師事し、また、福士松濤（青森県教育界の中心人物）に思想的な影響を受けて、大正十三年に相馬兎二・対馬桜桃子・小田川塘月らと松濤社を起こし、昭和五年に「寂光」を主宰した人である。〈俳句によって彼岸の寂光に行きつく生活、郷土愛に透徹して三昧境に入ろうとする俳句、この二つの渾一した、まことこそ県俳壇の真流である〉という主張を掲げていた。

当時三十代の玉麗にしてはずいぶん老成した主張であるが、福士松濤の精神が反映していたようだ。松濤は東洋思想や芭蕉を研究しており、「門弟のうちに底を抜くものなし。底のぬけたるものは新古の差別なし。きのふけふあすと流行して一日もこれを止めず」（俳諧問答）を例にして、〈新たなる境へ詰め寄せよという。寂光を誠にして不易の心法を確立し底ぬけに流行したいと思う〉と教える人であった。

当時の私にはよくわからないながらも、〈郷土の俳句〉が眼目となったことは確かである。玉麗は中央志向より地方志向にこだわってがんばっていた。

私が出席した何度目かの句会で、玉麗と孤蓬が一句の批評をめぐって衝突した。互いに一歩もゆずらず、けんか別れになってしまった。俳人の真剣さと強情さに、私は驚いたのである。

青森には松濤社のほかに、超結社の青森俳句会という句会があることを知ったのも、その頃である。昭和十五年に青森市内の俳句結社が合流してできた句会で、はじめは松濤社も参加していたが、既成結社の解散という前提に従いきれずに、松濤社は孤塁を守っていたのであった。

雲よ雲よ逝く春を縋る何もなし　　玉麗

その後しばらく句会に出ることもなく、大野林火の『現代の秀句』や『俳句研究』を精読することで満ち足りていたが、ある日孤蓬が訪ねてきて「青森俳句会」に入らないかという。今度は孤蓬居で青森俳句会のメンバーが集まって句会をやっていた。宮川翠雨・千葉菁実・福田空朗・西沢赤子・柿崎無為・田辺天涯・新岡青草・吹田孤蓬・吹田登美子・佐藤正夫・西田山草・長内蔦生らが常連で、斉藤草村・工藤忠一郎・福士行思・佐々木雪層らが時々顔を見せていた。

松濤社とは全く雰囲気が違う、自由な同人ばかりの活発な句会であった。多くは学校の少壮教師で、それに画家あり書家ありというわけで、俳句の合評が芸術論へ発展するのがつねであった。また石楠系の俳人が多いので、私には親しめる句会であった。

ここでも模造紙に墨書きの作品掲示方式で互選合評をするのだが、それを叩きと称して論じ合うのである。夜の十二時を過ぎることがふつうで、登美子夫人はいつも夜食を出してくれた。食料事情がきびしい戦時中なのに何かおおらかであった。おそらく当時の全国の句会事情としては、その自由さにおいて特異な句会ではなかったかと思う。初心者の私は、彼らの一家言を吸収するばかりであった。

稲りんりんみのる夜寒を思ひをり　　菁実
大硯に墨気ただよひ凍てんとす　　山草
冬雨の河口に光るきのふけふ　　翠雨
青林檎その葉の色と別れけり　　空朗
未だき春身のなき蟹をすすりけり　　無為
十二月八日ぞ太鼓うち鳴らす　　青草
雪の野を汽車早くなる壮行歌　　忠一郎
雪青き厨にけふの掌を洗ふ　　登美子

戦争がはげしくなるにつれて、同人の誰彼となく毎夜のように孤蓬居に集まって句会をやっていたので、特高に呼び出されて孤蓬は大いに弁明したという。

昭和二十年七月二十七日の夜も灯火管制の乏しい明りの下で句会をやり、空襲警報のサイレンが鳴って解散したのであった。青森の街はまたたくまに火の海となり、私は逃走しながら、乳呑児を抱えた孤蓬夫妻があの袋小路の家からうまく逃げただろうかと思った。焼け出された私は北津軽の姉の家に移り、やがて終戦を迎えた。

その年の秋、青森の街に出て焼跡のバラックの書店で孤蓬と出会い、お互いの健在を喜び合った。彼は無精ヒゲの顔に配給の戦闘帽をかぶり、肩に布製の袋を提げていた。こっちも似たような服装である。彼は私をバラックの食堂へ誘い、青森俳句会から新しい俳誌を創刊する計画を語った。眼が輝いていた。

昭和二十一年二月、「暖鳥」が同人誌として創刊された。九頁の俳誌であった。空襲で死んだ西田山草のほかは従来の同人がほぼ揃い、仙台の永野孫柳も参加してくれた。孫柳は作品批評を担当して助言、句会にも二度ほど出席して俳句の静エネルギーについて語るなど、忘れがたい人である。

昭和二十年代に参加した主な新人は、新谷ひろし・浅利康衛・今みき子・梅木きみ・永澤耕子・武藤翠峰・伊東昭五・佐々木とみ子・寺山修司・京武久美・橘川まもる・近藤昭一・平山五朗・奈良北州・俵谷皆二・中西久男・田辺未知男らであるが、このうち今も俳句に関わっ

ている人は五人にすぎない。ただ、俳句から他のジャンルに移って活動している人や夭折した人が多く、そのすぐれた素質が惜しまれる。

私が戦後移住した家は北津軽の岡田晴秋の家であり、彼が遺した書斎をそっくり使わせてもらって、農作業をしながら五年間も滞在してしまったのは、読み尽くせない本のせいでもあった。青森の句会に出るのも稀で、もっぱら誌上の交流で歳月を過ごした。昭和二十一年十月から「萬緑」に参加して、地方と中央をむすぶ視座を定めて句作を開始した歳月でもあった。実際には俳人との交際を忘れた歳月といってもよい。

昭和二十五年五月、これまでの生活に別れを告げて五所川原の町に移り、「暖鳥文庫」という古本屋をはじめたのだが、町の文学青年や絵画青年が寄ってきて、たちまちサロンになってしまった。一緒に店をやった従兄弟が大学時代から小説を書いてきて、店を小説の勉強部屋のように使っていたから、それを嗅ぎつけて類が類をよぶのであった。

いま、五所川原の市長をやっている詩人の佐々木遠城も来て、詩と短歌と俳句の会をやろうという。公民館を利用して二年ほど詩話会を続けたあと、俳人の人たちが独立した句会を持つことになって現在に至っている。五所川原俳句会である。私にとってもっとも濃厚な俳句仲間といってよい。

これまでに参加した主な人は、前田水馬・増田木亘子・平山五朗・奈良北州・三上北人・敦賀晴川・尾崎泉草・寺山常三・三上悠三郎・葛西仙三等で、今も活躍している人は五人、故人五人。故人の中の三人はめっぽう酒が強く、時折けんかになった。情っ張りなのに俳句がうまく個性的なのも、津軽人らしいといえばいえる。

草取りて清しき畝の歪み見ゆ　　五　朗

蚊火焚いて不平は母に言ひやすし　　悠三郎
泥炭（さるけ）焚く一つの強き貌見たり　　常　三

昭和二十六年の晩夏、東奥日報主催の県下俳句大会に招かれて中村草田男が青森に来た時、一週間滞在して「津軽」五十五句の大作をものにされたが、青森俳句会の人たちが便宜をはかってくれて成功したのも忘れがたい。とくに新岡青草は自宅を歓迎句会場と宿に提供し、翌日の十和田湖吟行にまで同行して、心許ない案内者の私や川口爽郎を援けてくれたのであった。

草田男はすでに大家であったが、世にも旅にも慣れない純真な人であり、その人を無事に案内する自信など私にはなかったので、新聞人で世慣れした青草の同行が有難いわけであった。草田男にしてもそれを察して、安心して旅行できたはずである。

青草と孤蓬は小学校以来の友人で、青森の浜っ子の気質があり、開放的で人間好きであった。青草は臼田亜浪門の人であるが、早くから草田男に注目していた。彼は旅館の蚊帳の中で、自作についての感想を草田男に求めてやまず、草田男もいちいちねんごろに応えて、しんから俳句を愛している人同士の会話を、同じ蚊帳の中で私は感心しながら聞いていた。

蒼々と蔦は脈打つ岩襖　　青　草
滝の音身ぬちにひびく一歩一歩

昭和二十八年私がはじめて「暖鳥」の選者になったとき、青森高校生の寺山修司や京武久美ら俳句グループの連中が熱心に投句して、ずいぶん張り合いがあった。私が第一回萬緑賞を受賞した年でもあり、彼らにショックを与えたようであった。彼らの俳句熱を煽ったことは確かである。勉強をそっちのけにして俳句に夢中になっている彼らを、教師の宮川翠雨などは半ば心配しながら見守っていた。

東奥日報主催の俳句大会に加藤楸邨が招かれて来たとき、修司と久美が私に楸邨を紹介してほしいというので、東奥日報社の応接間に連れて行ったら、彼らは用意していたたくさんの俳句について楸邨に感想を求め、その熱心さと巧さに楸邨が舌を巻いた場面があった。「うまいなあ、うまいなあ、うますぎるよ」という楸邨の嘆息が、昨日のように思い出される。

メーデー歌朝の運河に菜がうかび　　修　司
風鈴や母と故郷を異にせり
吠ゆるときおのれぬくもる狼か
雪虫に厚き暗闇農家の喪　　久　美
鳩の群雪の静かさ触れあへり

今の高校生でこれだけの俳句をつくる人がいるだろうか。とくに修司は本歌取りの才能を発揮して、湧くように俳句をつくっていた。パロディとアレンジに私は注目し、他人のマネのできないマネをむしろ評価した。

彼が早稲田大学に進んだ年に「短歌研究」の新人賞に選ばれたが、その多くの歌に模倣が指摘され非難されたとき、彼に手紙を書いた。「君のアレンジの才能は俳句や短歌よりも演劇に向いているのではないか」と感想を述べたのだが、彼からは返事がなかった。

昭和五十八年に彼は死んだが、死ぬ前に新しい俳誌を創刊する計画があったと聞いて、彼が俳句にこだわっていたことが、あらためてわかったのであった。

青森文芸ブックレット（定価は税込み）
中村草田男訪問記　成田千空　５００円
千空句帖（戦時下の手作り句集）　１０８０円
発行　青森文芸出版

【『萬緑合同句集』2　中村草田男編】

成　田　千　空

1 青森　2 大10年　3 成田　力　男　4 書店経営
5 五所川原市新町五五　6 昭和21年萬緑参加
28年萬緑賞　31年同人　45年「成田千空句集」

藁葬る火よ迅雲の西津軽
砂を売る砂山の村北風晒し
仰向けに冬川流れ無一物
白鳥来るや群立つ波の呼び応へ
桃馥郁病む辺も風の通りみち
早苗(なへ)とりの朔風にあり腰決る
早苗田に手を染めしより時遅々と
日は山から柿曼陀羅の母の家
人日の子と会ふや道延々たり
捨林檎押し退けざまに北へ河
焚火して泳ぐ茫々石狩川
緯度たかき緑大圏馬嘶く
滚々と雪ふる夜空紅きざす
春雪を握りしたたる拳保(もつ)
雪ごもる雀の声と我が燈近し
高く広く崖を離るる鷹は父
わが前の白紙いつまで虫の故郷
蠟燭をともし姥泛く雪の国
病む母のひらがな言葉露の音
雪を踏み納骨の山ふり向かず

昭和五〇年三月一日発行
定価三〇〇〇円
発行所　萬緑発行所

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1．調査・研究に関するもの（4000字以内）
2．回想の成田千空（2000字以内）

締め切り　第9号は1月末、到着順に掲載します。

送り先　（下段発行所、青森文芸出版あて）
＊Eメールで送信くださる場合
sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

会員名簿（48名）

〈青森市〉浅利康衞、高森ましら、成田奉生、西谷ともえ、野沢省悟、未津きみ、吉田州花
〈平内町〉佐藤陽子
〈弘前市〉阿保子星、石﨑志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、舘田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
〈藤崎町〉清水雪江、世良啓
〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
〈十和田市〉日野口晃、米田省三
〈五所川原市〉荒関映子、一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉木村武彦
〈中泊町〉外崎文夫
〈つがる市〉兼平一子
〈深浦町〉草野力丸、山本こう女
〈盛岡市〉瀬川君雄
〈茨城県〉矢須恵由

☆北極星☆

○版画家・藤田健次さんが選んだ表紙画は、方言詩「ばげ(晩)」である。藤田さんのユーモラスな版画とマッチして楽しい。千空さんには俳句と方言詩を『月刊東奥』に投稿した時代があった。入選作「旋風(ハマリカゼ)」は、木村弦三の作曲で譜面とともに掲載された。

○師・中村草田男の千空句評を、初期の『萬緑』から転載させて頂いた。若いころの千空俳句がどう評価されていたかを知って頂きたいと考え、中村弓子さんにお許しを頂いた。

○小池淳一さんからは『千空句帖』の鑑賞を頂いた。戦時下の千空は結核療養中の身であり、親友の出征が相次ぎ、死と向かい合う日々であった。孤独と虫という視点から千空句を捉えていて興味ぶかい。

○西谷ともえさんの、「中村草田男句碑建立まで」は、県立図書館〝文学の小径〟に草田男の「はまなすや今も沖に未来あり」が建立された経緯について。県外の人の句がなぜ、県の土地に建てられたのか、そこには千空さんの尽力があった。

○11月17日は千空さんの没後9年。さまざまな想いが交錯している。

2016年11月17日発行
会報『千空研究』第8号　非売品（会員配布）
発行　俳人 成田千空研究会
佐々木　達　司
〒037-0004
五所川原市唐笠柳藤巻467
青森文芸出版内
TEL　0173-35-5323
FAX　0173-35-8414